中國見聞記

名稱は『日本中國友好協會學術代表團』、メンバーは左の十一名

團長　福島　要一　農　學　學術會議會員
團員　山田勝次郎　經濟學　土地制度史學會會員（以下年齡順）
　　金子　二郎　中國語　大阪外國語大學教授
　　本城市次郎　動物學　大阪大學兼京都大學教授
　　佐久間重男　中國史　北海道大學助教授
　　神山　惠三　氣象學　氣象研究所員
　　島田　虔次　中國史　京都大學助教授
　　小林　英夫　地質學　北海道大學助教授
　　小川　修三　物理學　廣島大學助教授
　　安野　愈　物理學　東京教育大學朝永研究室助手
隨員　福島　一正　日中友好協會組織部員

年齡のひらきは、最長老の山田勝次郎さんが六十歳をわずかに越え、最年少の安野さんが三十歳にわずかに足りない。十一月二十六日羽田發、十二月二十七日羽田着、往復とも BOAC のジェット機、香港までの所要時間は、往きが五時間あまり、歸りが三時間半あまり。國交が回復されて、北京へ直行ということになれば、二時間半くらいで達するのではあるまいか。

中華人民共和國との學術交流は一九五四、五五年の頃から始まり、五七年には物理學、考古學、醫學、農學の專門別代表團の派遣など、いよいよ本格化した。全國最初の地域學術代表團として、重澤俊郎教授を團長とする京都の一行（日中友好協會京都府連派遣）が訪中したのもこの年である。中國からも各專門の代表團が、あるいは招請により、あるいは學會出席のため、あい次いで來日し、交流は非常に活潑となつてきた。それが五八年の例の長崎國旗事件によつてついに、頓挫のやむなきにいたつたのである。（もちろん、例えば法律家代表團の例もあるように、日本からの訪問がこれで完全に停止したわけではない）

この停頓狀態を打破しようとして日中友好協會は、昨年秋、中國人民對外文化協會との間に協定をむすび、その結果、中國科學院の招待に應ずるというかたちでわれわれ學術代表團の派遣となつたのである。そしてその具體的推進にあたつては文獻交換その他、學術交流の地道な努力を默々とつづけてきた京都日中の力にまつところが多かつたことは、東京の諸氏もひとしく口にしていたところであつて、やはり特筆しておいてよいと思われる。團員の詮衡（希望者は全國で五一名あつた由）にあたつて無暗な大物羅列主義を排して少壯氣鋭主義を原則としたのも京都側の主張であつた、と聞いている。いろいろないきさつの末、私のような若輩が選に入りえたのは右の原則のおかげといつてよい。ただ恥ずらくはこの少壯、すこぶる氣鋭ならざりしことを！――そのほか今回の派遣に關してわれわれの諒解したのは、この團が他ならぬ日中友好協會の代表團でありしたがつて單なる學術視察、交歡でなく日中の根本趣旨たる友好と國交正常化の爲めのものでなければならぬというのが大前提であること、また團ぜんたいとしての使命が、今後の人的物的な交流の爲めの方策、特に具體的には、六〇年初頭以來の中國側の文獻輸出の極度の制限に關して、その眞意と今後の意向とをさぐるという點にあること、などの諸點であつた。かくてわれわれは建國以來十一年、『科學發展十二ヶ年計畫』（五六年より實施、十二ヶ年で先進

諸國の水準に追いつき追い越そうとするもの）さなかの新中國を訪問することとなつたのである。

二十六日。香港九龍、金門酒店に一泊。香港の猥雜さについては既に多くのことが指摘されているが、そのほかに私の注意をひいたのは、學校のべらぼうに多いところだということ。何とか小學、何とか中學、何とか英文學校など、しかつめらしい校名の生徒募集廣告が至るところベタベタ貼つてある。本當にあきれるほど學校が多い。公寓の一室に二三十人の生徒を集めて、それでもう學校でござい、ということらしい。流寓のインテリの生計の道である以上に、植民地人の生活のための必須の『資本』として、萬難を排して教育を受けさせるという。『教育』がなければ外人商社などに就職することはできず、うだつの上る日は絶對に來ないのであるから。

二十七日、午前九時、九龍停車場發。四つめの驛に大浦墟というのがあり、そのローマ字綴の方では、墟の字に Market とあてあつた。一〇時一五分深圳着。十一時ごろ徒歩で國境（幅一〇メートル？くらいの小川）の鐵橋をこえ、中國側の深圳停車場にむかう。すでに國境には、北京の中國科學院より宋守禮（科學院哲學社會科學部連絡處副處長、哲學者）韓雅泉（科學院對外連絡局辨公室副主任、十七歳で共產軍の遊擊隊に參加したという）黃鳳英（三〇歳くらいの婦人、對外文化協會通譯、北京大學日本語科卒）の三氏、および科學院廣東分院の文平氏、が出迎えていられた。深圳―廣州は快車で三時間。廣東語と普通語（標準語）の兩方でひつきりなしに車內放送。かけあい萬才で衞生週間の宣傳をしているのが面白かつた。

窓から見たもの――水牛（ただし普通の牛の方がむしろ多い）實のなつたバナナの樹。安南式？の躍つたような屋根の民家をときどき。驛々で丸腰の兵隊（兵隊は到るところで見かけたがすべて丸腰である）家や建物の壁、塀には例外なく共產主義萬歳、大躍進萬歳などなどのスローガン。爽快なのは眼をさえぎる商品廣告板の皆無なこと。午後三時、廣州車站着。科學院廣州分院の黃副院長（京大物理の出身、日本語は流暢）などの出迎えあり、愛群大厦に入る。

夕食まえ、本城さんたちと街々を散歩。ホテルから二十歩あまり、斜に向いあわせて、中山醫學院第二附屬病院というのがある。なに氣なくのぞくと『孫逸仙博士開始學醫及革命運動策源地』と金文字で刻んだ高さ六、七メートルの紀念碑が眼に入つた。裏面に『中華民國二十四年十一月二日紀念大會立』側面に英文を添えてある。そのかみのいわゆる廣州博濟醫院はまさしくここだつたのである！近代史に興味をもち、馮自由の革命逸史などを漫讀していた自分としては、旅行の前途に何か幸先のよさ？を感じてうれしかつた。前景は道路をへだてて珠江の悠々たる流れ、その中流には發動機船やジャンクがいそがしく上下し、岸べには蛋民の舟がむらがつている。（もつとも、蛋民という言葉を用いてはならぬ、今は水上居民とよぶのだ、と誰かが叱られていた。すでに水上特別區も廢されて、完全に市の人民公社に編入されている由。廣州の人口は三〇〇萬、うち市內一九〇萬、が一五の人民公社に分かれている）

日曜日のせいか街は大變な雜沓である。そのあちこちの道ばたに、小學校の低學年くらいの子供がしやがんで何か賣つている。新聞紙半枚にも足らぬ紙をひろげ、そのうえにタバコの卷紙をならべているものと、刻んだ葉のみを盛つているものと、の二種類があつた。もちろん禁令を犯してのことに相違ない。上海、廣東は政治的

にむつかしいところと聞いていたが、これはそのあらわれか。

二十八日、午前七時、廣州車站發、京廣線の直通快車で北上の途につく。出發後まもなく、洪秀全の鄕里・花縣附近を通過したが、一帶は丘陵が實になだらかに起伏しているのみで、何の變哲もない。もつとも、洪秀全に因んでいえば湖南省境の坪石（午後二時一五分停車）で洪秀全の妹が立てこもつた山寨というのを見た。斷崖絕壁、驚くべき天險で、高さはあまり高くはないが、驛のまん前に突如としてその岩山がそそり立つている風景は實に異樣である。太平天國が既に滅亡したとも知らず、彼女はこの天險によつて最後まで抵抗したのであるという。文學代表團の『寫眞・中國の顏』三〇ページではけわしさが多少やわらげられているように思う。實際の感じは文字どうり垂直な絕壁で、こんなところに立てこもれば、たとい一ヶ小隊くらいの軍勢でも相當な大軍を惱まし得ただろうと思われた。だいたい此のあたり、南畵そのままの奇怪な山や岩が甚だ多い。南畵のあのつくね芋式山水が決してほしいままな空想の產物でないことは、早く奧村伊九良氏の文章で承知していたが（『瓜茄』五號、北川桃雄氏もいつか『世界』に書いていた）正にその通りである。――坪石の手前の韶關は、さすがに『湘贛粤三省の要道を扼し、粤北最大の城市たり』というだけあつて、乘降の客が多い。むかし王陽明が思恩遠征に際しての道筋も、まず杭州より富春江をさかのぼつて江西省に入り、更に贛江をさかのぼつて江西省を縱斷、南雄からこの韶關に出、あと、われわれの通つた路程を逆に廣州に下つていつた筈で、そう考えるとなつかしさにたえなかつた。

七時一五分、衡陽着。王船山先生に敬意を表すべく、プラットフォームまで下りて見たが、黑暗暗で市街がどちら側にあるのか、まるで見當もつかぬ。霧のような雨が降つていた。

一一時三〇分、長沙。小野川秀美氏の『戊戌變法と湖南省』（『清末政治思想研究』）に詳細に描かれているように、長沙こそ改革運動、ひいて革命運動のそもそもの發祥の地である（のちの毛澤東の鄕里・湘潭も長沙のすぐ西南）。せめて街のあかりなりと望見して紀念としたいと思い、私はここまで睡魔と戰いつづけてきたが、まつくらなること衡陽に同じ、何の收獲もなかつた。

二十九日。午前七時三〇分ごろ武昌。ついで漢陽―（玉帶門）―漢口。音にきく長江大橋も汽車で通ればあつけない。辛亥革命の舊跡は指呼するに由なく、ただ、到るところ建設中の工人宿舍らしきもの、また、煙突や高爐の屹立する壯觀を見るのみ。

午後四時まえ、駐馬店。この邊から何だか地上の樣子が變化しはじめたように思う。これまでどちらかというと赤味がかつた地肌であつたのが、黃色くなつてきたし、また、畑の一筆の面積が實に廣大となつてきて、しかも極めたように美事に耕し、ならされている。恐らく機械力によつたのであろう。目算に弱いので數字的に何とも言いかねるが、とにかくべらぼうに廣い。但し、此を南北の差としてよいのか、それとも今まで車窓より眺めた風景がとかく山地がち（少くとも遠景にはかならず連山を望むような地形）であつたのに、このあたりは一望山をみぬ大平原であるという點にもとづくのか何とも判斷しかねる。はるか地平の空に雁の列を數行みとめた。

三十日、午前七時五〇分、北京驛着。一昨年落成した新驛で舊來の前門のそれではない。ふるえあがる寒さ。科學院の張友漁副院長西園寺公一氏はじめ十名ばかりの出迎え。東交民巷の新僑飯店に入る。（舊同仁病院の南、崇文門のうち側）。晝までぐつすり眠る。午

後、自動車で市内遊覽。天安門廣場、天壇など。ホテルには東歐諸國人のほか、黑人の青年（？）も少なくない。ガーナとか聞いた。

――暖房が時として三〇度にまで昇つたのはそのせいであろうか。遊覽で冷えこんだせいか、夜半に腹部激痛、下痢四、五回。脂汗をながす。

北京でのわれわれの日程は次のとおり（カッコ内は風邪または疲勞のため私の參加できなかつたもの）

十二月一日　午前（工業交通展覽館）午後、民族文化宮　夜、科學院秘書長杜潤生氏の招宴、全聚德にて。

十二月二日　午前、農業展覽館　午後、革命軍事博物館　夜、民族歌舞團公演、北京劇場にて。

十二月三日　午前、北京大學、午後、講學〔佐久間さんと私とは科學院歷史研究所にて〕

十二月四日　（萬壽山）

十二月五日　午前（農村人民公社）　夜、科學院院長郭沫若氏の招宴、人民大會堂新疆の間にて。

十二月六日　午前（歷史博物館）午後（對外文化協會、紅十字會へ挨拶）夜（對外文化協會副會長陽翰生氏招宴、四川菜館にて。ついで、京劇野猪林）

十二月七日　午前、教育部高等教育司副司長胡沙氏をかこむ座談會、ホテルにて〔高等教育とは大學教育の意〕午後、學術活動〔佐久間さんと私は歷史研究所にて所員と座談會〕

十二月八日　午前、（外交學會へ挨拶）午後、都市人民公社（北京西城福綏境）

十二月九日　午前、陳毅副總理と會見。午後、分散活動〔金子、佐久間、私は北京圖書館へ〕夜、廖承志氏招宴、四川菜館にて。

十二月十日　午前、分散活動〔私は通譯の黃鳳英さんにつれられて歷史博物館へ〕午後、科學院秘書長杜潤生氏をかこむ座談會、ホテルにて。夜（紅軍歌舞團）

十二月十一日　午前、農業部副部長魏震五氏をかこむ座談會、ホテルにて、午後、自由時間〔私は琉璃廠と東安市場の古本屋へ〕夜、杜潤生氏招宴、北京飯店にて。

十二月十二日　あさ七時すぎの快車で北京站發、津浦線を南下。

さて、北京での日程は以上の如くに進行したのであるが、その間の見聞をいちいち報告している餘裕は到底ない。さいわい、われわれより四、五ヶ月まえに訪中せられた文學代表團の開高健氏『渾沌の外で』（『世界』十月―一月）や前掲『寫眞・中國の顏』の類があるので、それらを參照されることを望みつつ、以下、主として學界關係のことのみをまとめて記してみたい。

まず、關係の機關として取りあげるべきは、中國科學院歷史研究所、北京大學、北京圖書館、歷史博物館などであろう。また、杜潤生氏の科學院全體についての話や胡沙氏の高等教育についての解說にも言及する必要があろう。そのほか人民大學、民族學院、故宮博物館の三つが最初のスケジュールには入つていたのが、陳毅氏との會談という突然の出來事があつたために次々とスケジュールが狂い、遂に割愛のやむなきにいたつたのである。なかでも人民大學は革命史研究に特色を有すると聞いており、またそこの尙鉞（故安部健夫教授監譯『中國歷史概說』の著者）氏には森鹿三教授から頗る

興味ある質問を授けられていたので、ぜひ訪問したかつたのであるが、遂に如何ともなしえなかつた。もちろん、團員各自は、それぞれ訪問希望の機關や、會談希望の學者の名前をランクをつけて列擧し、前もつて工作員の方に提出してあつた。しかし何分にも團が專門を極度に異にする學者たちの混成旅團であるから、各自の希望が大幅にくい違うという點があり、また、中國側でぜひ見せたいもの、省くわけにゆかないもの、が一定數は存在するという點もあつて、それに時日の制約も加わり、隨分スケジュールの編成は困難であつたらしい。出來あがつたそれは『學術』代表團の日程として必ずしも滿足すべきものではなかつた。したがつて、專門別にみた訪中の目的は必ずしも十二分に達成されたとはいいがたいが、しかし考えてみると、今日の中國の學術界の動向を理解するためには、單なる專門分野をこえた、國ぜんたいの動向という背景を把握してかからなければ充分でない、という事情が特に強くあるのであるから、現段階ではこのスケジュールはむしろ妥當なものであつたかも知れない。それにしても、馮友蘭、容肇祖など、つねづね深い學恩を蒙つている諸先生に個人的にお目にかかる機會をもち得なかつたことは、やはり、この上ない遺憾であつたが、ただひとつ、お目にかかつて親しく敎をうけたいと願つていた學者の隨一、侯外廬先生と何度も接觸できたことは望外の幸福であつたといわねばならぬ。それでまず侯先生のことから始めよう。

侯先生はわれわれの接待委員（？）であつたらしく北京到着の日の握手を別にすれば、翌日晩の全聚德（明代からつづいている料亭の由）でのレセプションで隣りあわせに席をしめ、親しくよもやまの話をうかがつて以來、或は研究所で、或はレセプションで、最もしばしばお目にかかつた。長身、面長、無髯、顏色はあまりよいとは言えない。どちらかというと寡默なほうであるが、必ずしもとつつきにくい感じではない。周圍の人からも侯老侯老と親愛せられているように見うけられる。こうしてお目にかかるまで、なぜかしら先生を嚴厲な方のように想像していたが、お會いしてみるとこんなに和氣な方なので安心した、と言うと、天井を仰いで呵々大笑され、それから隨分はなし易くなつた。以下、私と佐久間さんとがこもごも訊き、先生が答えられたことのうちから、めぼしい點を拾うと、山西太原の人、明年六十歲、というから、明けて今年六十歲のはずで、アジア史辭典その他に、山西介休縣の人、一九一二年生、というのは訂正を要しよう。玉樞というペンネームで資本論の繙譯第一册を出版したのが著作活動のはじまりである。ただし、第二、第三册は國民黨反動派の壓迫がきびしくて出版できず、原稿も失つてしまつたが、解放後、その一部が北京圖書館に保存されているのを知つた。資本論出版の當時は北平大學（北京大學とは別）に奉職していたが、壓迫によつて遂に職を退かざるを得なかつた、などなど。中國における資本論繙譯史上、侯氏の譯本がいかなる地位を占めるものか私はまだ詳かにしていない。テーブル・マナーとして私語にのみふけつているわけにもゆかず、誰かのスピーチの間は神妙にしていなくてはならず、それにいちばん參つたのは、談いよいよ佳境に入りそうになると肝心の私の中國語の能力が聽取力・會話力ともに底をついてどうにも動きがとれなくなつてしまうことで、先生は氣の毒そうな顏をして沈默に歸えられるし、實に情ない思いをした。井上清さんのように一人でゆく場合には、一人に一人の通譯がつききつてくれるから問題はないが、團體でゆく場合、切角イン

チメートな話ができる機會がやつてきても、その時はどうしても通譯の數が足りなくなり、中國語がある程度できないとニッチもサッチもゆかなくなる。こういう大眞理を發見した時は、しかし、後の祭であつた。

料理の話、酒の話、風俗の話などの一般的話題（先生は政治的な話は殆どされなかつた）の他に、學問上の問題についてもいろいろ聞くことができた。宴席でも聞いたし、また、歷史研究所でも聞いたが、以下にそれらを一括して書きとめておくことにする。（もちろん、問題の提出は私のみではない。つねに佐久間さんと行をともにしていたから、同氏の質問に對する答えも以下には含まれている）

第一に歷史人物の階級性の判別の問題。つまり、某々は農民出身であつたからその思想は農民的、という風な說の當否の問題である。原理的に考えればこのような說をそのまま肯定する者は殆どあるまい。しかも實際の、具體的な歷史記述となると、餘りにしばしばこの素朴なやり方が採用されている。われわれ人文科學研究所の比較革命史の會でもよくこの點が問題になるので、試みに侯先生の意見を叩いてみたところ、曰く、思想の一貫した體系と態度とを見るべきで出身は單に一つの參考にすぎない、中國には『出身論』という言葉があつて、これは正しくないということになつている。トルストイは農民出身でなかつたしマルクス、レーニンはプロレタリア出身ではなかつた云々。だいたい豫期していた通りの答えであつた。問が餘りに月並であつたのである。

第二に王亞南の提出した領主封建制・地主封建制という說について。中國のいわゆる封建制がヨーロッパ一日本的な尺度ではどうにも割りきれないということは周知のところであるが、王亞南はこの點を理論的に把握すべく、ヨーロッパ的封建制を領主封建制と呼び、中國的なそれを地主封建制と類型化したのである。侯先生はこの說を餘りよく御存じなかつたようで、いつたい誰の意見かと反問され、それからしばらく考えたのち言わるるには、領主も地主の一種である（私のノート如此、或は地主も領主のとすべきか）、ヨーロッパの如き完備した領主は中國にはいなかつたが、しかし、そのことは領主がいなかつたということを意味するものではない、と。重ねて、地主・小作關係は契約關係であり、領主・農奴關係とは性質を異にするように思うが、と問うたのに對し、契約關係というものは資本主義的なそれとは性格はちがうけれども封建後期には既に存在した。宋以後はすなわちかくのごとし、と答えられた。この問題はもつと突込んで訊くべきだつたろうが、かんじんのこちらに餘り素養がないのでこれで中絕。佐久間さんは他の質問をねらつていたらしく、助け舟を出してくれなかつた。

第三は資本主義萌芽問題に關する討論の最近の動向。此の方面ではその後あまり見るべき發展はない。最近はむしろ農民戰爭に關する論戰が活潑である——と前おきして、いわゆる萌芽の時期については、それを宋代、甚しきは唐代に求めるもの（ごく少數）と、明淸の際に求めるもの（大多數）の二通りの見解がある。この問題は大變むつかしい問題で、萌芽の程度という點を考慮せねばならず、そのためには、また、地域差（長江地方とその他の地方など）の問題、マニュファクチュアの問題、雇傭關係の問題、國內市場の問題、貨幣地主（？）の問題、自然經濟の問題などの諸問題を綿密に檢討しなくてはならぬ。この『程度』という點を考えないと尙鉞のように、萌芽がありさえすれば、そこからもう近代史とすべきだとい

う主張が出てくる。われわれは一八四〇年以後を近代史と考え、その内容が半封建半植民地と考えている。この點は毛主席が既に指摘しているところである、云々。これも大體われわれが既に承知している以上のものではなく、むしろ、最近のいわゆる農民戰爭に關する討論の内容の方がききたかつたのであるが、なかなか思うようにはゆかない。そのほか近代史の分期問題、漢民族形成問題など、一時學界をさわがした問題についても最近別に新しい提案もない由。

第四、一昨年ごろ一部から相當つよく出されていた新しい地方志編纂の提唱は何か成果があつたか。――たしかに方々でその試みがなされている。わが歴史研究所でも河北省昌黎縣の縣志の編纂にかかり、原稿は既にできあがつた、云々。(猶この地方志編纂は別に全國的な企畫中心があつて、それに從つて方々で分纂している、というわけではない、との趣旨を言われたように記憶している)

第五、最近、土地文書などの文書類が續々と發見蒐集されつつあると聞くが、その狀況――當研究所でも相當あつめている。日付のもつとも早いのは南宋のもの、ついで一部は元代、もつとも多いのは明代である。史料集として出版の意圖なきや、との問には、有りとも無しとも答えられなかつたと記憶する。

歴史研究所は前後二回訪問した。正確な地址を訊くことを忘れたが、東單の東、建國門の手前(?)ではなかつたか。『中國科學院哲學社會科學部』の標札の掲げられた構内に歴史研究所、文學研究所、哲學研究所などの建物が集まつている。第一回の訪問は一二月三日午後、講學のため。まず私が『中國における主觀唯心論の歴史とその評價』という題で一時間あまり前座をつとめ、ついで佐久間さんが『日本における中國史學研究の現狀』と題して四〇分ほど、私の原稿は二〇〇字詰で六〇枚、それを前日渡しておいたら一夜のうちに完全に繙譯されてあつたのには驚いた。(趣旨は東方學報京都二八の拙稿とほぼ同じ)時間の關係で日本文の最初の一枚のみ私が讀み、あとは通譯の王達祥さんに譯文の方を一瀉千里に讀みあげてもらつた。聽衆は婦人數名を交えてほぼ六〇名、侯先生、司會、尹達(考古研究所副所長)劉大年(近代史研究所副所長)の兩氏も列席。聽衆はすべて歴史研究所の研究生の由。天氣のせいもあつてか、陰鬱なうす暗い講堂、一樣に藍色、灰色の綿入れ外套を着たこれ等きまじめな聽衆の前に立つた時は、學者というより何か工場勞働者の前で話しているような錯覺におそわれざるをえなかつた。時間の關係で、質疑應答がぜんぜん無く、ただちに次の佐久間さんの話にうつつてしまつたのは物足りなかつた。私の考えは中國の通說とかなりくいちがう(私がマルクス主義者ではないことも、はつきりことわつておいた)ので大いに異論がでるだろう、めちやくちやにやつつけられるかも知れない、と可成り緊張していただけに、失望を禁じえなかつたのである。しかし、翌日の郭沫若氏の招宴で侯先生に會つたとき、君は昨日、張横渠・王船山=唯物論、朱子學=客觀唯心論、陸象山・王陽明=主觀唯心論というシェマ、かつ、思想としての價値(進歩的意義)はこの順序に遞減するというテーゼ、を中國思想史學界の通說として批評したが、あれは一部の論者の意見で、必ずしも通說ではない、また自分は王陽明學說に對する君の積極的評價や左派王學と陽明說との關係についての君の說には贊成できない、自分の考えは中國思想通史の第四卷下册にはつきり述べておいた、と話された。侯先生主編の『中國思想通史』は單にその包括性詳細性の點でこれまでにその比を見ない大著である

のみでなく、全卷鋭い獨創的な解釋と問題提起にみちている點でも、解放後中國思想史學界の最初の金字塔（日本であればさしずめ恩賜賞、朝日賞ものであろう）と斷言して憚らないが、いかんせん日本にはそのとき第四卷・上册までしか入つていなかつた。その第四卷下册はのち北京を離れる直前に、先生から私と佐久間さんとに贈つてくださつたので、早速ひろい讀みしてみると、なるほど朱子における主觀唯心論的要素が强調してあるし、陽明に至つては、その『反動的荒謬』さが完膚なきまでに指摘されている！　私のいわゆる中國學界の通說なるものは、その實、馮友蘭系統の人々の通說にすぎなかつたのかも知れない。

十二月七日、第二回訪問。今回も日本語の達者な王氏が通譯として同行。座談會。侯先生以下、古代史の張政烺氏、甲骨學の胡厚宣氏など、そのほか世界史のひとをも交えて十二名。しかし發言はほとんど侯先生のみであつた。さきに掲げた侯氏の談話はこの日、佐久間氏と私との問に答えられたものも多いのである。この日、侯先生や近代史研究所學術秘書劉桂五氏から聞いた研究所の制度的な面の說明を記しておくと、まず研究生の來源に三種ある。一、大學の史學系の卒業生および外學留學を終つて歸つてきた學生、二、種々の機關の幹部、三、その他試驗によつて採用するもの。これらの研究生（歷史研究所に現に八名いる）は三年後に再び試驗をうけなくてはならない。そのほかに大學を經て、あるいは試驗によつて入つてくる實習研究生というのがあり、歷史研究所で九六名いる。研究生の育成方針はいわゆる『邊干邊學』で、古い專門家より學ぶこと、外國語を學ぶこと、集團的研究に參加し、その一部分のテーマをもらうこと。かくて、集團的研究と個人的研究の兩者を併進させるのである。また、集團的研究のやり方は會讀形式でなく、問題別の討論を主體としている。現在研究中の集團研究のテーマを訊ねてみたが、さまざまな問題について、とのみで具體的に擧げられなかつた。また出版物については、歷史關係の三研究所が別々に出版しているものはなく（？）連合して『歷史研究』などを出し、また、不定期に史料などを出しているとのこと。不定期の史料とは、侯先生の說明によると、單に部內史料のみでなく、例えば『歷代大同思想史料』その他のようなものを指しているのである。――ついでに、中國科學院は、數學物理化學部、技術科學部、生物學部、地學部、哲學社會科學部の五學部にわかれ、そのうえに學部委員會（全國の著名の學者二三二名より成る）があり、また別に最終決定機關として院務委員會がある。科學院の使命としては、社會主義建設のための最高學術研究ということ以外に、新しい科學部門および、いろいろな科學分野の境界領域の研究という點があげられる。しかし制度面は實はまだ考慮中で、たとえば他の社會主義國のように學位（博士）制度を作るか、ソ連アカデミイのように終身會員制をとるか、いまのところ我々は否定的だが、要するに結論は出ていない。研究生についても體系的なやり方はない。將來は一人の學者が一〇―一五人くらいを養成するようにしたい。また、各研究所（合計八〇ほど）が北京に集中しすぎているので、これを思いきつて地方に分散させたい云々。これは後日、杜潤生氏から聞いた話である。

なおこれは第一回訪問の際のことであつたが、年初以來の文獻杜絕について眞相をただしてみた。すると實に意外なことは、侯・尹達・劉大年三氏ともその事實を知らざるもののごとく、われわれの文獻が日本に行つていないはずはない、もし行つていないとすればそ

れはむしろ日本の國内事情のせいではないか、という。そして又、あるいは次のような事情のせいかも知れぬ、と尹達氏が語つたところによると、最近、學術雜誌の整理統合のために『歷史研究』など發行を一時停止しており、それは二ヶ月で終る豫定であつたのが實際は三ヶ月もかかつてしまつた、この休刊は國家の要求に應ずるため、また、最近の中國の情勢に追いつくために、これまでの經驗を檢討總括する必要があり、それで休んだのである、しかしもうそれも了つたから、『歷史研究』はやがて第六號が出るであろう、以後、この雜誌は隔月刊となる筈である、と。文獻の輸出が極度に制限されたことを尹達氏など編輯もとが知らなかつたのは或いは事實かも知れない。しかし、それにしても休刊云々は說明にはならないであろう。何故なら、『歷史研究』についていえば、第一號―五號までの既刊ぶんがそもそも入つてきていないのであるから。われわれの文獻交換積極化の提案に對して、三氏とも、研究機關間の交換は當然おこなわるべきである、といい又、國交未回復の今日、無駄だとは思いながらも、留學の可能性について打診をこころみたところ、甚だ結構なことである、いずれきつとその日が來るであろう、とのみで具體的な答えはなかつた。――この日、文學研究所、哲學研究所をも訪問したく思つていたが實現できず、せめて歸りがけに歷史研究所の書庫を見せてもらつた。目下の藏書數三七萬五〇〇〇册、木造二階建の研究所の建物の階下にぎつしり詰まつていて、通路は殆んど身をひるがえすこともできぬ位。外はもはや夕闇が濃く、暗い電燈の光では充分にたしかめることはできなかつたが、明人の集などさすがに珍しいものが相當あるように見うけた。

北京大學（學生一一、〇〇〇、敎師二、二〇〇）は市の西北部、もとの燕京大學の地址にある。途中のポプラ並木は素晴らしい。ここへは團員一同で出かけたが、『東洋史研究』むきな話題は殆ど何もないといつてよい。沿革・現狀・敎育方針について敎務長の雄辯な說明がありそれを拜聽し了つたら十二時すぎ。列席者は歷史系副主任の周一良氏（東方史）、東方言語學の季羨林氏、東方言語學日本語副主任の卞立强氏。京大中國文學の人たちからの强い要望もあり、中國文學史の集體創作という前代未聞の事業をなしとげた學生たちと會談したいと申入れたが叶わず、あと外文樓の日本語敎室をのぞいただけで歸途につかざるをえなかつた。――なお、敎務長の話と後日の胡沙氏の話とから拔萃すると、五二年の院系調整によつて應用・技術方面の單科大學たる『學院』と、理論的、基礎的な自然科學・社會科學を專攻する『大學』とが分かれ、文科は五年、理科は六年。五八年の總路線・大躍進を契機として、大學敎育の目的としては勞働者政治への服務、敎育（學問）と生產（勞働）との結合、黨の指導性の確認、が打ち出されたこと、文科・理科ともに學生は卒業までに一定期間農業または工業の勞働に從事すること（北大で一四ヶ月）、留學生は北大へ四〇ヶ國（うち一二ヶ國は社會主義國）から來ていること、敎授のうち黨員は一〇〇分の二〇位であること、人文系學生の數は全體の一〇〇分の一五（北大では人文系一、自然科學系二の割合）であること、など。

金子、佐久間、私の三人が北京圖書館を訪問したのは陳毅外交部長との會談のあつた日の午後であつた。陳毅の談話というのは『皆さんが文獻や資料の交換を切望していられることを聞いた。資料交換については實際的なとりきめをしてよろしい。過去にある種の刊行

物を停止したのは學者や中國研究者に對してやつたことではない。氣象についても漁業などに必要という點もあるのでこの方面の資料も手筈をとりたい。（註、氣象關係は軍事に直接つながるものとして最も困難視されていた）われわれは研究して方法をかえてみたいと思つている。私たちも外國の刊行物はたくさん買つている。交流はよいことで、日本の友人たちのまじめな研究を歡迎する。惡意ある者の利用を恐れはしない。資料の中には事實をつたえない正しくない資料もあるが、私たちは事實を反映した客觀的な資料を渡したい』というもので、われわれは心中ひそかに歡呼の聲をあげたのであつた。この原則論をきいた午後、執行機關ともいうべき北京圖書館國際交換組主任の毛勤女士の口からも次のような言葉をきくことができたのである。『今年（一九六〇年）は從來とちがつて質のよくない書物は外國に送らないことにしたが、そのさい通知しなかつたことは甚だ申譯ない。又、日本から要求されたもので送らなかつたものもあるが、そのさいも通知しなかつたことを殘念に思う。しかし書物や期刊を日本の皆樣に送るのは我々の仕事のうちで重要なものである。今後はできるだけ御希望に副うようにしたい』私が京都の日中から携えていつたいろいろな註文にもこころよく善處を約し、また、京都の日中あてのマイクロフィルムもできるだけの努力をはらつて私の離京に間にあわせてくれた。毛澤東と同姓のこの主任先生、いかばかりなる偉丈夫にやあらん、と思いのほか、年のころ五十歳？ばかりの素朴なおばちやんで、貧弱な躰にぶくぶくの褲子、すつかりど肝をぬかれた。しかしサインの際のみごとな筆蹟は、さすがに藏書數六〇〇萬册（解放直後一〇〇萬册）の中國最大圖書館の要人たるに恥じない。時間が足りなくてもよりの一般書の書庫を二、三層參觀して辭去。閲覽室を通りぬけるとき、洋裝本によみふける青年たちにまじつて、老人が毛筆でしきりに寫しものをしている。肩ごしにそつとのぞいてみたら、陳鱣という文字が眼にとまつた。

北京でお目にかかつた學者には、まだ、李儼、席澤綜の兩氏がある。李先生は周知のごとく中國數學史の最高權威、聰明溫雅そのものといつた感じ、席氏は四〇歲前後か、天文學史の中堅どころであろう。ともに藪内清教授からの名刺をことづけたのに對するホテルへの御回訪である。李先生は目下、一七〇〇年以降の日本數學史をやつていられること、五七年以後、歷史研究所内に自然科學史研究室が獨立したこと、解放後、若い人で天文をやる人がふえたこと、など。北京を離れる前夜のことであつた。

北京一二日、南京二日、上海五日、杭州二日、廣州三日、の見聞が與えられた紙數で書ききれるとは勿論おもつていなかつたが、それにしても北京だけで了るとは心外千萬である。急いで南京大學（學生七、〇〇〇、教師八〇〇）その他をつけ加えておく。南京大學は解放後、中央大學、金陵大學、南京大學の三者が統合されたもので、その歷史系は學生二八八、教師四〇。圖書二六、〇〇〇册、中文雜誌六〇種、露文雜誌二〇種、その他二五種、を備える。何か機關誌を出していられるか、と訊いたのに對して「沒有」との答えは甚だ不審であつた。中國古代史教研組（どの大學でも古代とは便宜的な名稱で、一八四〇年まで）中國近代現代史教研組、世界上古中世史教研組、世界近代現代史教研組の四部分に分かれ、前三年では、理論方面としてマルクス・レーニン主義、政治經濟學、國際

共産主義史、考古方面として古代漢文、基礎として中國通史、世界通史を修め、後二年は專門で、中國史、世界史、中國檔案の三部分に分れるという（通譯者が誤つていなければ）。中國檔案とはわが古文書學にでも相當するのであろうか、檔案の整理などを課するとの說明であつた。中國史方面では經濟史、民族史に眼目をおいている由。目下の研究テーマは三つあり、一、東南沿海地域の經濟發展と階級鬪爭、これは明清より解放までの時期にわたる。二、元朝史、三、中外關係史（英、米、ソなどとの關係）。一は教師と學生、二は教師と研究生、三は老教師とごくわずかの若い教師、および學生、が共同に研究しているという。更に、おそらく右の一の細目と思われるが、イ、明清以來の蘇州の織物業の調査、ロ、清末の張謇の南通大生紗廠の調査、ハ、太平天國土地制度の研究（明年、すなわち今年が太平一一〇年なるを紀念して）の三種に目下とり組んでいるとのことであつた。以上が歷史系主任の韓儒林、主任助理茅家琦、中古史(?)教研組副主任洪煥椿の三氏より聞いた概略で、イ、ロ、ハの場合、しばしば實地調査を重ねているとのことである。例の『中國資本主義萌芽問題討論集』の續編がここで編輯されたのはこのような研究の進行と無關係ではあるまい（六〇・二月刊）。ここでは珍しく研究題目を詳細に教えてもらつて大喜び、もつとじつくり訊こうと身を乘りだした途端に、好事魔多し、團員に急病人が出た爲め、あわてて辭去せざるをえなかつた。――ほかに南京博物院、太平天國紀念館、紫金山天文臺の儀器など語るべきことは多いがすべて割愛。

上海では復旦大學（學生六四〇〇、教師八五〇、藏書九五萬册、歷史系學生三〇〇）、上海市博物館、これも割愛。

廣東では中山大學（學生四、七〇〇人）と廣州博物館。中山大學歷史系は學生三六〇、教師五五（うち教授副教授一七）、世界史の鐘一均氏と、明代の社會經濟史で有名な梁方仲氏にお話をきいた。梁氏はすこぶる素朴な人なつこい方である。近く『中國歷代戶口土地田賦統計』という八〇―九〇萬字の著述を出される由で、既に三校を了つたとのことであつた。かつて日本に遊んだ時のことや、內藤乾吉、吉川幸次郎、仁井田陞など諸氏の噂をせられる。また、日本の學者からよく拔刷をもらうが餘り返事を出していない、そんな方々に會つたらよろしく傳えてくれ、などなど。岑仲勉氏もここに居り、陳寅恪、容庚の老先生も元氣で研究に沒頭していられる由。

けつきよく博物館のこと、書店のこと、すべて省略せざるをえない羽目になつてしまつた。殊に北京その他の歷史博物館についてはただただ絕讚あるのみで、博物館といえば考古・美術博物館一色といつてよい我國の現狀に對比して頗る考えさせられたし、殊に北京のそれでは、同治年間、福建晉江縣の故居より出土した李卓吾の石印、甘肅武威縣出土の儀禮木簡（儀禮七篇が完整なる形で出た！というから、まさに西漢經師の舊を窺うに足るもの）、びつくりするほどでつかい蘇州のハタオリ機、などトピックは山ほどあるが、すでに目に餘る紙幅超過なので御勘辨いただきたい。（島田虔次）